

佳作

僕に「命」をありがとう

静岡県 掛川市立桜が丘中学校三年 増田 温斗

「お母さんにとって大事な子。お母さんが欲しくて産んだ子だからね。」

まだ小さかった頃、僕がかんしゃくを起こすと、母は必ずこう言いながら僕の背中をトントンとしてくれた。母にぎゅっと抱きしめてもらうと、安心して力がすっと抜けていったのを覚えている。小学四年生の時、自分の誕生について調べてくる宿題が出た時、初めて母子手帳を見せてもらった。母から聞いた僕が生まれた時のこと、僕は決して忘れることはないだろう。

僕の母は、持病がいくつもある。それなのに、いつも明るくてがんばり屋。「また何か無茶をするんじゃないか」と周りが心配するほどだ。姉を産むときもいろいろハプニングがあって、命がけの出産になったらしい。それでも母は、

「二人目が欲しい。私は絶対に死なないから、もう一人産みたい。」

と父に言ったそうだった。父が反対したであろうことは予想がつく。こんな母がいたからこそ、今、こうして僕はここにいます。

妊娠七週目のエコーの録画、僕の心臓はピクピクと一生懸命動いていた。まだ豆粒ほどの小さな体なのに、「がんばっているよ」と言っているみたいだった。お腹の中は、きつと居心地がよかったのだろう。何の問題もなくすくすく育っていき、予定通り、帝王切開で取り出されることになった。

手術は無事終わったかのように思えたが、事態が急変した。僕は、呼吸ができなくなり、すぐにNICU（新生児集中治療室）に運ばれた。急に空気中へ出たため、空気におぼれてしまったそうだった。僕は、一度も母に抱っこをしてもらうことなく、保育器の中で治療を受けることになった。チューブや点滴が付けられた小さな僕を想像すると、自分で自分がかわいそうになってしまふ。

一方、病室では、母にとって長い夜が始まった。主治医が来て、

「すみません。お子さんは難しい状況です。」

と母に謝罪の言葉があったそうだ。ひと晩安静にするように言われていたのに、

「連れて行って。さっきまでお腹で元気に動いていたのに……。今すぐ会いたい。」

と泣きじゃくって、看護師さんをお願いしたと教えてくれた。僕は、泣いている母の姿を見たことがない。どんな状況でも乗り越えようとする強い母が、僕に会いたくて何時間も泣いていたと知り、すごく切なくなった。

いつまでもふさぎ込んでいないところが、やっぱり僕の母のいいところだ。母の希望で、生後五日目から自力で母乳を飲む練習が始まった。また、僕が泣いたら夜中でも母に連絡がいき、母子同室と同じような環境をつくってもらえた。ちよっと心配もあったけど、僕は母と一緒に我が家へ行くことができた。

母が僕に会うのを待ち望んでいてくれて、とても嬉しかった。僕に「命」をありがとう。ずっと母を大切にしたいと思う。